2011年11月12日

八頭町まちづくり企画案



みらいの環境を支える龍谷プロジェクト 龍谷大学 牛尾洋也

八頭町まちづくり企画案を提出するにあたって

八頭町は、中核市である鳥取市に隣接し、平成 17年に郡家町、船岡町、八東町の三町が 合併し発足した鳥取県東部のまちです。

八頭町は、合併後、平成 17 年からの 5 年間に「人が輝き・集い・夢広がるまち」という構想を掲げ、「八頭町総合計画前期基本計画」を策定実施し、新たなスタートを切りました。また、平成 22 年からの 5 年間は「同後期基本計画」を策定し実施段階に入っています。その中で、まちづくりの基本目標として、①住民ひとりひとりが主役のまちづくり、②安らぎと生きがいのあるまちづくり、③自然と共生した快適な安全なまちづくり、④豊かな心を育み文化のかおるまちづくり、⑤地域の個性を活かした魅力と活力のあるまちづくりの 5 本柱を掲げ精力的にまちづくりに取り組んでいます。

私たち龍谷大学の「みらいの環境を支える龍谷プロジェクト」(通称:みらプロ)は、龍谷大学と鳥取県の包括協定をきっかけに、八頭町に赴き、今年の7月から調査を開始しました。その中で、行政や商工会の方々や地域に住む方々へのヒアリングを重ねることで、八頭町が今置かれている状況について認識するとともに課題への解決策を模索しました。また、地元の八頭高校生とワークショップやフィールドワークを行い、今までまちづくりに直接触れ合うことが少なかった高校生の新鮮な意見を聴くことができ、本企画案における1つの大きな指針となりました。

私たちは約 4 ケ月の八頭町での活動を通して、地域社会の課題と共通点を見出すことができたとともに、調査を重ねながら八頭町の地域資源を視覚的に表した「八頭町沿線景観マップ」や本企画案は、今までの八頭町におけるまちづくりとは異なった、先駆的かつ多角的な視点に立ったものとなっています。

最後に、今回の活動に至り、ご協力頂いた八頭町役場の方々をはじめ、八頭商工会議所の方々、地元住民の方々、八頭高校の方々には改めて感謝申し上げます。また、本企画案が今後の八頭町におけるまちづくりの更なる発展に寄与できれば幸いです。

2011 年 11 月 12 日 (土) 龍谷大学 牛尾洋也 みらいの環境を支える龍谷プロジェクト 眞田章午、藤本智子、西脇秀一郎、高橋拓也、田村直広 延藤真一、野村悠衣、松木慧、松本尊道、川上友貴 黒瀬遥加、谷本加奈、成瀬陽一、松本光、村越亮太

日次	
第一章	これからのまちづくりの可能性

I. 地域社会の再生	
Ⅱ. 八頭町現地調査の成果 - これからのまちづくりの可能性-	
Ⅲ. 八頭の地域の「宝」をつなぐ若桜鉄道	
Ⅲ-1. 地域交通と若桜鉄道	
Ⅲ-2. 各駅調査	
第二章 八頭町まちづくり企画案	р3
第一「人とまちづくり」	
I. 趣旨、目的	
Ⅱ. 効果	
Ⅲ . アイデア	
・町民協議会の創設	
・多様な意見交換、ワークショップの場をつくる	
・若桜鉄道沿線における規制の導入	
IV. 具体的な検討案	
第二 「食とまちづくり」	p 7
I. 趣旨、目的	
I -1. 趣旨	
I -2. 目的	
II. ねらい	
Ⅱ -1. 内(住民)	
Ⅱ -2. 外(観光客)	
Ⅲ . アイデア	
企画内容	
IV. 展望(実際にあてはめてみたらどうなるか)	
第三 「観光とまちづくり」	p11
I. 趣旨・目的	
Ⅱ. 効果	
Ⅲ . アイデア	
・マンホールを地域資源として活かす	
・八頭町観光計画書の作成	
・観光を「つくる」「まもる」「育てる」	
(1) 地元住民にも魅力的な観光をつくる	
(2) 既存の観光をまもる	
(3) 新たな観光、人を育てる	

p1

広報のアイデア 八頭の魅力体験ツアー

第三章 「人」と「食」と「観光」をつなぐ

p22

- ・沿線を活用した空間づくりの可能性
- ・地域の方々と観光伽木うが一度に集まる空間づくり ~滞留拠点としての駅前空間の活用~
- ・多様な視点との連動をはかるまちづくり ~ワークショップを中心とした空間活用~
- ・各視点との連動をいかにはかるか
- 総合プランの位置づけのために〜制度化による、まちづくりを応援!~

第四章 若桜鉄道を中心とした八頭町の地域活性化にむけた条例(素案) p27

第一章 これからのまちづくりの可能性

I. 地域社会の再生

今日の地域社会は、少子高齢化や価値観の多様化など種々の要素が相まって、地域社会のつながりが希薄化していると言われている。さらに、農業における害獣被害等、自らの生活に密接に関係した様々な課題が発生している。このような状況を打開するには、市民・行政との協働はもとより、よりきめ細やかな対応を可能とする、地域内での人と人との助け合い、支え合いといった地域社会の再生が必要不可欠である。

Ⅱ. 八頭町現地調査の成果 -これからのまちづくりの可能性-

八頭町は、すでに柿・梨をはじめとするフルーツの地域ブランド化と、「西の妖怪、東のかかし」でも有名な、かかしを町内の至る所に設置することなど、様々なまちづくりを行っておられる。この約 4ヶ月の間の私たちの調査では、こうした今あるものを活かしながら、より魅力的な八頭町にしていくためにはどのようにすれば良いのかを地域を周りながら考えてきた。

まちづくりとはいっても、とりわけ、地域の方々が自分のまちに魅力を感じ、より関心をもつことが大切であると考える。行政と町民が一体となってまちづくりに取り組むことで、地域の魅力をともに守り、作り、育て、そしてさらなるまちの魅力の向上へとつながる。これらのまちづくりのきっかけとして、日常生活ではなかなか気づかないまちの魅力や良さ、美しさを再確認し合うことで、地域内の方々が「まちの良さに気づく」ことは非常に重要であるのではないかと考えた。



以上の考えの下、フィールドワークや地域の方々へのインタビューを実施し、多くの方々 まちについてお話ししていただいた。そこでは実に沢山の意見やお話を聞かせていただい たのだが、中でも、昭和初期の哀愁漂う「若桜鉄道」を中心としたアイディアなどの多様 な視点が存在することに気付いた。

まちとともに走ってきた若桜鉄道は、その駅舎のほとんどが登録有形文化財に指定されており、まちの歴史や文化をつなぐ地域資源である。歴史・文化を感じる駅舎、車窓から眺める山並みや景観が広がり、また、町内から若桜鉄道と遠景の山脈を借景として眺めたときに見える豊かで壮大な良好な景観についての声も聞かれた。一方で、フィールドワークの中では運行本数や自動車交通等との関係から八頭町民の利用頻度は少ないとの声もあったり、沿線周辺には雑草等が生い茂った土地も数多く、手入れがされていない箇所が存在するところも見られたりした。

このような、地域に根付いた資源を活用しながら、いかにして機運と魅力を創出し、さらなるまちの活性化につなげていくのか、これからのまちづくりについて検討した。

Ⅲ. 八頭の地域の「宝」をつなぐ若桜鉄道 Ⅲ-1. 地域交通と若桜鉄道

八頭町には、まちの中心を走る若桜鉄道があり、まち全体をつなぐ地域資源がある。こうした若桜鉄道において、地域内外の方々が乗車したり、駅前という空間をさらに活用したりすることで、新たな「人と人とのつながり」をつくることができ、また、「観光客と地域住民とのつながり」を生み出すことが可能であると考える。



Ⅲ-2. 各駅調査をふまえて



10 月末、私たちはメンバーを振り分け、若桜鉄道の駅を中心とした沿線の調査を行った。

駅はその地域の特徴を表し、「まちの顔」と呼ばれる場所であり、また、駅周辺も同様である。今回のフィールドワーク等を通して見えてきたものは、駅ごとに異なった「まちの顔」があるということであった。私たちが降り立った駅前や駅舎の中には地元の方々が集まり「会話」や「笑顔」があった。これは、鉄道沿線や駅前空間からまちを考え、すでにあるものを活かしながら、「人と人とのつながり」をより発展的に考えるアイディアのきっかけとなった。

若桜鉄道が、「八頭町民」と八頭町の地域資源である「食」と「観光客」をつないでいるという発想から、今回は、「人とまちづくり」「食とまちづくり」「観光とまちづくり」の3つ視点で、八頭町まちづくり企画案を検討する。



第二章 八頭町まちづくり企画案 第一 「人とまちづくり」

I. 趣旨、目的

まちづくりにおいて大切なのは「人」の 視点である。観光客が外からたくさん来訪 することも地域の活性化につながるかも しれないが、大切なのは住民が自分のまち に興味と誇りを持って日々生活し、外へ発 信することだと考える。住民たちが八頭町 として自慢できる地域資源を発見し、まち のことをもっと知ったり、誇りをもって発 信したりすることが、八頭町の魅力を内側 からアップさせ、もって地域活性化に資する。



Ⅱ. 効果

八頭町にはフルーツという素晴らしい地域資源がある。その他にも、豊かな自然、白兎 伝説、若桜鉄道といった地域資源や、地域住民にしか分からない八頭らしさ(「ここからの 景色がいい」など)があるかもしれない。それらの情報を地区内や隣の地区の人、行政と 共有し合い、確認し合うことで自分たちの住むまち「八頭」は魅力がたくさん詰まったま



ちであることをお互いが認識することが必要である。こうした魅力を認識する機会を設け、 共有したまちの魅力をどう保全・創造していくのかを制度面で支えることも重要である。 ひいては八頭に対して誇りを持ち、観光客や 八頭以外の地域の人にも自信を持って発信できる人を育てる。

Ⅲ. アイディア

町民協議会の創設

八頭の魅力を知っている人が多くいることはとてもよいことであるが、そのような人が 個々に点在するだけではなく、相互に情報共有し合い、つながることでよりよい成果を生み出す。そこで、八頭町民で組織する町民協議会を作ることが考えられる。個人や地域ごと (八東や隼地区など) での活動をつなぎ、まち全体について議論し活性化をはかる主体をつくる。

多様な意見交換、ワークショップの場をつくる

地域に住む人たちが、まちの魅力や地域の宝を考えるなどの機会づくりを図る。

すでに実施されている朝市など人が集まる空間の一区画を活用するなどして、地域の方々、行政、学生、観光客等の様々な主体や視点を交えながら、まちについて議論し合うワークショップをおこなう。



若桜鉄道沿線における制度の導入



若桜鉄道は八頭の地域資源である。鉄道の車窓からの眺めは八頭の景観を感じることができる一つの「視点場」である。その際、たとえば沿線に耕作放棄地や、空家、雑草林などは景観を損なう原因の一つでもあるため、極力ない方が良い。

八頭らしさを保ちながら、より魅力をアップすることにつながる。そこで、一定の規制を若桜鉄道沿線に導入することで、若桜鉄道を八頭の地域資源として活用する。

Ⅳ. 具体的な検討案

	【町民協議会】	
(1) 概要	・八頭町民で組織する町民協議会を作る。個人や地域ごとの活動を	
	つなぎ、まち全体について議論し活性化をはかる主体をつくる。	
	・構成員は八頭町民とする。	
	・まちの良さを町民目線から検討し、行政とのまちづくりの連動を	
	はかる。	
(2)活動内容	・自分たちの地域の良さや良好な沿線景観等の情報共有し、八頭町	
	全体の魅力を知る。	
	・共有した情報をワークショップなどで町民に還元する。	
	・検討の結果、町民目線からの行政への提案する。	
	・沿線景観の監視や監督(詳しくは後述)。	
	・ワークショップ等のまちづくりイベントを企画や運営する。	
(3) 視点・方向性	・単に課題発見をするだけのようなマイナスの視点ではなく、より	
	よくするためにはどうすればよいか等といったプラスの視点で検	
	討する。	
	・八頭町と積極的に協力して、町民、行政、観光客が一体となった	
	まちづくりを推進する。	
	・条例や行政の作る計画の中で、協議会の存在や活動内容を制度的	
	に担保する。	
	【ワークショップ】	
(1) 概要	・軽トラ朝市などの既存のものとも併合しながら、人が集まる空間	
	を活用するなどして、地域の方々、行政、学生、観光客等の様々な	
	主体や視点を交えながら、まちについて議論し合う。	
	・協議会や行政が企画、運営する。	
(2) 何をするか	・写真を撮りながらまち歩きをし、まちの魅力に気づく。	
	・撮った写真を活用しながら、マップ作りや八頭らしさとは何かに	
	ついて議論する。	
	・観光客はマップを見ながら地域を歩く。	
	・ワークショップで議論したまちのいいところや悪いところ等の議	
	論内容については、行政の計画策定の時に活用する。	
(3) 交流	・町民の方々や行政の担当者だけでなく、高校生や観光客と一緒に	
	実施することで、内側だけの視点ではなく外から見た八頭の視点も	
	取り入れる。	
	・次の世代にカカシなどの歴史文化を伝え、いろんな世代が集う空	
	間作りがみらいの八頭を担う「人」をつくる。	

【制度化】

~若桜鉄道を中心とした八頭町の地域活性化にむけた条例 (素案) ~

(1)概要	条例(人を支える制度づくり)
	八頭の地域資源である沿線景観の良好な部分は保全し、景観を損
	なうものについては規制を行う。
	楽しみながらする地域の活性化を「条例」でまとめ上げることで、
	制度面でまちづくりを応援し、支える。
(2) 内容	地区の指定
	対象地域は一律ではなく、たとえば以下のような地域指定が考え
	られる。
	①若桜鉄道車窓から最も近景であり、保全、修景が必要な地域
	②若桜鉄道車窓から遠景の眺めであり、豊かな自然の保全が必要な
	地域
	③八頭町から若桜鉄道と遠景の山脈を借景として眺めた時に特に
	保全が必要な地域
	規制
	沿線にある雑草林、耕作放棄地、空家、屋外広告物、色彩等の景
	観を阻害するものについて規制する。
	助成
	駅舎や文化財など、良いものの保全には助成を行う。また、良い
	ものに調和した建物等を作る際にも助成を行い、保全だけでなく創
	造も行う。
(3) 連動	行政、町民、観光客等との連動
	・沿線状況の監督とパトロールを町民協議会に委任し、行政は、町
	民、観光客等とともにまちづくりを推進する。
	・その他、必要に応じて関係機関や他の市町村との連携をはかる。

第二 「食とまちづくり」

I. 趣旨、目的

I-1. 趣旨

フルーツのまちと言われているほど、第一次産業が盛んな 八頭では、食材に多く恵まれている。しかもフルーツ以外に も野菜、卵、魚、米などたくさんある。私達は、郡家駅にあ る「耕楽庵」で、八頭の食材をふんだんに使った親子丼など にも出会い、八頭の食の魅力に惹かれた。これほど多くの食 材に恵まれている八頭に、地産地消の観点から私達なりのア イディアを提案していきたい。



I-2. 目的

食というジャンルでは地元のものを使ったお菓子や料理を振る舞うことで、まちに人を 呼び込むことが可能である。

地産地消の視点からその場でおいしく食べてもらうことで、観光客などの外の人と、住 民がつながることのできる接点として認識して、今回、その食に改めて注目していく。

Ⅱ. ねらい

Ⅱ-1. 内(住民)

- ・八頭を支える第一次産業の向上が見込める。
- ・食自体でまちをさらにPRできる。
- ・住民の機運を高められる。

Ⅱ-2. 外(観光客)

- ・食自体で新たな観光客の創出
- ・食を手軽に知り、より楽しむための一つのツ ールとなる。
- ・まちの味を知ってもらうとともに、口コミとして八頭の認識が高まる。



Ⅲ. アイディア

「地元の食材でふるまう食マップ」 〜星を頂いて自分の店を宣伝しよう大作戦〜

企画内容

まちの食材を扱うお店にまちのマップを作成し、①まちのものを売る、②まちのものがその場で食べられる、③雰囲気が良い、という三項目を基準とした三ツ星制度を導入する。そして、そのマップに店の名前と獲得した星を書き、それを各駅や公共施設、外(鳥取駅・他県の施設など)に配置していく。

星を獲得すれば支援が降り(ふるさと 活性化基金1から支援)、マップは行政主



導で、住民が協力する形でワークショップなどを行い作成するものが理想である。そうすることで公正な広告、援助金などの星の推奨制度が活きると考えられる。「鳥取県ふるさと認定食品」2の基準を参考にし、「八頭のふるさと認定食品」などの名前をつけ、八頭ブランドの創出をしていく。

IV. 展望(実際にあてはめてみたらどうなるか)

マップの存在により、観光客がより八頭の食品に視覚的に触れることができ、八頭に興味を持ってもらうことができる。八頭の食材への認識が高まることにより、様々な効果をもたらすことができるだろう。それを3つにまとめて分類してみた。

一つくれる⇒八頭ブランド・流通経路・雇用・外とのつながりの場

食マップの作成により、住民は地元のものを使うことでの利点が生まれるため、改めて八頭のものに関心を持ち、なるべく八頭の食品を扱うよう心がけるようになることが挙げられる。八頭の食材がより多く消費されるなかで、八頭ならではの食品ができ、八頭ブランドの創出が図れる。観光客も食をその場で楽しめるため、マップで書かれた場



¹ 都市と地方の税収の格差是正などを目的に、住んでいる自治体に納める個人住民税の一部を他の自治体に回せるようにする「ふるさと納税」の仕組みができ、平成20年度から条例を定め、「ふるさと活性化基金」を創設。

 $^{^2}$ 鳥取県内で製造される加工食品のうち、一定の要件を満たすものを「ふるさと認証食品」として認証し、認証マーク(\mathbf{E} マーク)を貼ることで、ホームページやイベント等で認証食品を広く \mathbf{PR} される。

所は滞留の拠点となり外の人と、住民がつながることのできる接点の場として創出されていく。

また、八頭は現在、柿に関する食品などを加工する工場自体が八頭以外の地域にある現状である。しかし、八頭の食材が食マップによって、いままで以上に観光客の注目を浴び、多く食材が消費されることで、加工の過程が八頭に必要とされ、次第に加工自体も八頭で行われる必要が出てくるため、八頭内で加工過程における雇用も生まれていくのではないかと考える。

まもれる⇒担い手・第1次産業・販売店・住民同士とのつながり

農業に対して、若者が少なく後継者不足が深刻であり、また、売値が低く農業を続けていきにくい状況にあるとまちの方から聞いた。しかし、食マップなどの食に注目した企画をすることや、八頭ブランドを創出することで販売店からの需要が増し、農家などの第一次産業の向上につながっていくと考えられる。第一次産業への需要が増すことで売値もあがり、なにより八頭の食を支えるため、次の世代の意識を高めるきっかけになる可能性がある。そして、その食材を販売していく販売店も観光客が食マップで販売店を認識し、販売量の増加が見込こまれるため、農家と販売店が連動し、住民同士の繋がりが強くなると考えられる。

また、山田農園は農家民宿をまるごと貸し、宿泊してもらうという八頭の既存のものを 活かす活動を行っておられる。近年、これはグリーンツーリズムという言葉で表され、こ の基本的な考え方は、農山村や漁村に住む人々と都市に住む人々とのふれあいや住民どう しの交流を持つ事を目的としてとして注目を浴びている。

農村や農業を知り自然の営みとのふれあいを図ることで、幅広く都市と農山漁村との交流の場が増えるとともに、観光客が八頭の魅力に触れ、定住してもらえる人の獲得も期待できる。

そだつ⇒まち全体・将来のまち

食マップのような食の観点から何らかの企画を行い、 刺激を与えることは、農家と八頭の食材を使う販売店が 連動し、住民同士の繋がりが生まれることが考えられる。 第一次産業が中心となっている八頭のまち全体が活性 化されるとともに、食マップは観光客と住民がふれあう 滞留の拠点となり、外の人と住民がつながることのでき



る接点と交流の場として創出される。人の集まる場所がにぎやかになることは、住民全体 の機運の向上が図られることが挙げられ、そのにぎわいは長期的な目線からは、八頭の将 来を担う子どもたちにも自分のまちを誇りに思うひとつの要素になっていく可能性がある。

定住してみよう! グリーツーリズムと中期滞在型地域体験パック

近年、従来の短期の見学・購買型のパックツアーだけでなく、訪れた地域でその地域で しかできない体験をし、地域資源とふれあいことで日々の楽しみをツアーから得るといっ た「体験型観光形態」に注目が集まっている。

八頭町においても、山田農園さんのグリーンツーリズム農家民宿や、八頭の体験ツアーなど、町民・行政において多様な取り組みがある。

そこで、さらにそれらの取り組みを生かすために、将来的には体験をした人が八頭のまちに定住することも目指した中期滞在型体験パックを提案する。

一日体験→中期滞在型体験パック(一週間と一ヶ月)→将来的なリピーター・定住化

一週間と一ヶ月の期間にわけて、駅ごとの日々体験(駅周辺での体験)、食や体験コースご との日々体験、鉄道(仕事)体験、アウトドア体験、町民との共同(協働)体験、などの体験型 のツアーを用意する。

特にその地での地域体験として、学生や若年層に絞った行政マン体験や農業体験、販売体験などを企画し、これによって将来の仕事について考える機会創出も可能となる。

これらの企画の主体は、町民、行政、商工会などの各 主体による協議会において専門チームを設け、より良い アイディアを恒常的に生み出せるようにする。

体験に訪れる方々、体験ツアーを迎え入れる町の方々 双方の成長にもつながり、よりまちについて積極的に行動する主体の創出にもつながる。



食と観光→体験へ!

第三 「観光とまちづくり」

I. 趣旨·目的

地域の観光を考えることは、地域経済の発展を促進するとともに、観光促進に関わった 人々に交流の機会を与え、地元住民や行政、観光客間の相互理解を促進することにつなが る。また、新たな観光の視点で近年注目されている、滞在型の体験観光であるグリーンツ ーリズムのような観光を考えていくことは、八頭町を魅力あるまちにしていく上で重要で あるといえる。

上記のことを踏まえ、地域住民と観光客の双方に配慮した観光づくりは、地域に経済的ゆとりと心的ゆとりをもたらす。このような観光の視点が、今後のまちづくりにおいては重要な役割を担うと考えられる。

Ⅱ. 効果

地域住民と観光客の双方が魅力を感じる「観光」を創造し、広報することで、八頭町を 活気あふれる、誰からも愛されるまちにする。このような観光復興が、もう一度八頭町に 来てみたいという観光客数を増やし、地域住民にも、自分たちのまちをより良いものにす るという意識が生まれる。

Ⅲ. アイディア

「マンホール」を地域資源として活かす



八頭町には合併前の地域ごとに、異なったデザインのマンホールが存在する。地域ごとの雰囲気や空間をマンホールによって表すことは、大変面白い工夫であり、珍しいものであるといえる。何気ないものであるかもしれないが、このマンホールのデザインは八頭町にしか存在しないもので大切地域資源であるといえるのではないか。

これらのマンホールを活かした観光づくり、たとえば、地域それぞれのマンホールを通過点とする観光コースを作成してみるのも面白いのではないだろうか。コースを作成する際には、地元住民たちに集まってもらい、八頭の魅力を感じるコースを作ってもらう。

観光計画書の作成

観光計画書作成のステップ

ファテップ②

そこから見えてきた ものを項目立てする ップ② と共にに、観光計画 てきたものから、 書等を作成する。

ステップ③

Oステップ①

行政・商工会・観光・宿泊・運搬業の方々を交えてのまちの原状の再確認を行う。

これらのステップを経て見えてくるものや策定すべきものは何かを考える。



【例】

- ・八頭町観光の明確なイメージの確立→「八頭ブランド」
- ・固有の生活・文化を観光客へ提供→「八頭ライフ」
- ・情報発信体制の整備→「八頭チャンネル」、「八頭 Twitter」
- ・隣町、近隣都市との連携強化→「広域まちづくり連携協定」

問題点やキーワードを整理してみる。

問題	キーワード
①新たな観光資源をどう発見するか	若桜鉄道沿線景観、白兎伝説(歴史性)、公共
	資源の活用、マルシェ(販売、交流性)、食
②地元住民の地域に対する関心	協働、行政主導
③受け入れ側の体制は整っているか	協働、公共交通機関、食の場、宿の場
④情報は一元化・拡散できているか	パンフレットの一元化、Twitter の活用

①新たな観光資源をどう発見するか

観光客に愛されるものが必ずしも地元住民に愛されているとは限らないのではないか。 観光まちづくりとは、地域住民と観光客双方の視点から行われるべきものであることに意 識を置き、地域に入り込み本当に地域で愛されているものは何なのか、それがどうして長 年地域住民にあいされているのかを検討していく。

②地元住民の地域に対する関心

前掲の観光計画書作りに伴い、ワークショップなどを通して、行政と地元住民が意見を 交換し、双方の考え方を理解し合い、これまで気づかなかった視点に気づくことによって、 より一層自分のまちに関心を持ってもらう。

③受け入れ側の体制は整っているか

上記の観光計画書作成に、新たに住民の意見を取り込む。また、道の駅などが拡散し、 尚且つ、どの店も似たようなものを販売している現状を打開すべく、地域の拠点となる観 光物産館を設置する。

また、八頭町の地域交通機関は若桜鉄道のみであるが、その若桜鉄道も最短で、およそ 一時間に一本である。このことは、観光客にとって不便であるので、新たな交通機関、手 段の設置が期待される。

コミュニティバスを運営することは、観光客にとっても有益であると同時に、地域住民 同士の会話、交流の場にもなる。酔っ払いバス(夜間に集中して運営するバス)を開通させ、 新たに酒の場を八頭町に作り上げることが、八頭町の活性化につながる。

④情報は一元化・拡散できているか

八頭町役場の作成している、観光マップやパンフレットは多数存在しており、そのどれをとっても非常に工夫されており、素晴らしいものである。しかし、情報が一元化されておらず観光客にとってもどれに目をつけてよいのか分からないのではないだろうか。

そこで、原始的なパンフレットなどを一元化するとともに、Twitter や Facebook 等を駆使することで若者への情報配信を試みてはどうであろうかと考える。

観光を「つくる」「まもる」「そだてる」

(1) 地元住民にも魅力的な観光をつくる

住民と行政が交流できる協議会を定期的に行い、 そこで、観光についての住民がワークショップなど を行い、八頭町の観光をどうのようにして推し出す のかを議論する。ここでは、観光に関する意見だけ でなく、住民が地域に求めるサービス等の要望も聞 き入れる。

行政は、協議会で出た意見や要望が実現可能か検 討し、住民や観光客にとって有益であると思われる



ものについては実現していく。住民たちは、要望が受け入れられることによって、「自分たちのまちは自分たちで良くしていける」という意識が芽生え、住民たちが積極的に、魅力のある観光まちづくりを行っていくようになる。

(2) 既存の観光資源をまもる



若桜鉄道の沿線景観のような観光には、山や森のような自然の存在が重要であり、自然が破壊されてしまうと、観光にも影響が出ると考えられる。そこで、住民と行政が協力して定期的に集まり、雑草駆除やごみ拾い、植林などを行う。自然を「まもる」ということ以外にも、景観を「まもる」という視点から、沿線景観に調和しない建物を建てないなどの意識を共有していくことが重要であると思われる。

(3) 新たな観光、人をそだてる

既存の観光やグリーンツーリズムなどの 新たな観光を、日本中で有名になるように 「そだてる」=広報する。八頭町の存在を 全国に発信することで観光客を増やし、八 頭町を活性化させる。住民と行政が協力し て広報に努めることが望ましい。また、子 どもたちに八頭町の素晴らしさを伝えてい くことが、地元愛をもった人を育てること につながり、八頭町の広報にもつながる。



広報のアイディア

	つくる	まもる	そだてる
ブログ	①ブロガーの言葉を通	広報活動を行うブロガ	自分たちのまちの魅力
	して間接的に広める。	ーに対してのコメントを	を伝える講演会を開催す
		寄せる。広報に携わらない	る。ブログなどで広報して
		場合も可能な限りレスポ	ほしいことも一言添える。
		ンスを行う。	
Twitter	②Twitter などのウェ	他の団体との交流など	左の手法でできた繋が
	ブ広報を行う。	を積極的に行い同時に参	りを積極的に活用する。
		考にする。	
ウェブ	③ウェブで他団体のイ	交流を持てたら定期的	つながりを意識し双方
	ベント把握→参加、名	に連絡を取り合い、近況報	ウィン・ウィンの関係にな
	刺交換。(覚えてもらえ	告など交流会を実施する。	るよう行政、政策レベルで
	そうな服装で参加。)		のつながりを築く。
ホーム	④八頭町のホームペー	見ていただくためにも、	訪問者にはHPを見てい
ページ	ジに企画の招待券やク	相互リンクを増やす。	ただいた対価として特産
	ーポン券を掲載する。		品などを授与する。
チラシ	⑤チラシを他府県の教	先ずは町内で実施する。	広報した地域からのレ
	育機関や老人介護施設	行政の後援(教育委員会)	スポンスは重要視し、ツア
	等に配布する。	があれば可能ではないか	ーなどの付加価値をつけ
		と考えられる。	る。
コミュ	⑥これまで行ったシン	コミュニティを大事に	アンケート等の結果は可
ニティ	ポジウムやセミナー等	し、定期的にアンケートな	能な限りまちづくりに反
	の参加者コミュニティ	どで意識調査を実施する。	映させ、まちづくりへの参
	を結成する。	これにより持続的にまち	加が可能であることを印
		に関心を持ってもらう。	象付け、自主性を持っても
			らう。

「八頭の魅力」体験ツアー

みらプロメンバーが作成した2つのコースを具体的に紹介する。各コースは様々な視点からのコースとなっている。八頭町は自然的、文化的、歴史的な数多くの地域資源があり、様々な組み合わせのコース作りが可能であると考えられる。

若桜鉄道途中下車ぶらり旅〜沿線の四季折々を楽しみながら〜		
【コースの概要】		
(1) 趣旨	全国で初めて沿線全体の施設や駅舎、橋梁、転車台など	
	が国の登録有形文化財に指定された若桜鉄道や、自転車を	
	利用し、八頭町の自然・歴史を楽しむ。	
(2) 効果	終始電車に乗るのでなく、途中下車し登録有形文化財に	
	指定された駅舎を見学、徒歩で公園や歴史的名所を回るこ	
	とで八頭の自然を感じながら、歴史もみることができる。	
	また、自転車に乗ることで体を動かす運動になる。	
(3) 注意点	天満山公園の桜やイチョウは見頃の時季があるので、時	
	季外れの時のコース編成をどうするか。移動に自転車を使	
	う場合、駅にレンタサイクリングを作る必要がある。	

【具体的なコース】

徒歩30分 消費費 100kcl 徒歩20分 消費費 65kcl 自転車15分 消費% 60kcl

徒歩40分 消費程 140kcl

自転車10分 消費% 40kcl

船岡竹林公園(秋は西御門のイチョウに変更)⇒安部駅→(電車で10分)徳丸駅~清徳寺

徒歩45分 消費程 160kcl 自転車10分 消費程 40kcl 徒歩40分 消費% 140kcl

~丹比駅→(電車で 20 分)郡家駅 Goal

~…徒歩/→…電車/⇒…自転車

「白兎の伝承」探訪~白兎伝説ゆかりの地を巡って~

【はじめに】

白兎にゆかりのある神社やお寺を巡って白兎伝説を学びながらスタンプラリーをする。 スタンプを押す紙の裏には、お食事処を紹介し、クーポンなどの割引券を一緒に掲載し楽 しくまわってもらう。さらに、自転車で走って見えるときの地元民おススメの四季折々の 風景スポットが紙の裏に書いてあるので、おススメスポットを見ながら、サイクリングが 楽しめる。スタンプを 8 つの神社やお寺で全て押せたら、役場に戻って紙と交換で縁結び に関する賞品(たとえば、お守りなど)を受け取れることにする。

【コース概要】

(1) 趣旨	先ず若者	「を中心に、縁結びで八頭町に関心をもってもら
	う。それが	いらサイクリングを通して、八頭町のさらなる魅
	力に気付い	ってもらい、また来たいと思ってもらえるように
	する。	
(2) 効果	観光客が集まる。サイクリングを通して、さらなる魅力	
	に気づいて	こもらえたら、リピーターにもつながるかもしれ
	ない。	
(3) 注意点	縁結びだ	だけだと一回くらいしかきてもらえないかもしれ
	ないので、	他の企画と組み合わしたほうが良いかもしれな
	い。また、	リピーターを増やすために、スタンプを押す紙
	の裏を充実	させて、八頭町の魅力を知ってもらえるように
	する必要が	ぶある。
【具体的なコース】		
郡家駅		スタート地点とする。
↓ (1km・徒歩10分)		
八頭町役場		役場に無料レンタサイクルを設置する。
→ (1km・自転車5分)		役場が自転車を管理する。
賀茂神社		道路にまたがった鳥居が非常に珍しい。
↓ (1, 5 km・自転車7分)		
青龍寺		寄木造りの像を見よう!
↓ (2 km・自転車10分)		
福本白兎神社 (下記左図参照)		廃社となっているが昔の伝説にひたろう!
↓ (0, 8 km・自転車4分)		
池田神社		地元の人もあまり知らない隠れ名所となって
↓ (0, 8 km・自転車4分)		いる。
土師百井神社		現在もある大きな御神木に注目!

↓ (2 km・自転車10分)

八上郡郡衙跡

↓ (2, 5 km・自転車 15 分)

西橋寺

 \downarrow

役場

白兎神社や賀茂神社の創建ないし、祭神の事跡の 時代よりはるかに後のもの。

本堂向拝の上に左甚五郎作といわれる兎の彫刻がある。

自転車を返却し、スタンプを押した紙と交換で 賞品をもらう。





【コースの作成方法】

高校生、来訪者みんなで八頭のコースを作っちゃ Oh!

【概要・趣旨】

日本は四季折々の様々な文化(食、歴史、市場、里山、音楽など)を味わうことができる。鳥取県八頭町も春の顔、夏の顔、秋の顔、冬の顔や朝の顔、昼の顔、夕方の顔、夜の顔があり、また時代の流れと共に季節に関係なく日々変化していくものもある。そのため、体験コースを固定化するのではなく、何カ月~何年かに1回以上、改訂や新バージョンを増やし、体験コースのジャンルを増やしていかなければならないと考える。

しかしながら、各コースの設計を度々行うためには人員も必要であり、アイデアも必要となってくる。

そこで、このような場に、高校生や来訪者が関わり、行政、住民、高校生や私たち学生 (若者)、来訪者 (馬鹿者) の全員でコース作りを行っていくことにより、双方の様々な視点をみることができ、新たな発見が出てくると考えられる。

(1)実施主体・実施の流れや 規模

【八頭町地域魅力発見プロジェクトの発足】

①八頭町の魅力を発見し、またそれを来訪者だけでなく、住民にとっても利用してもらうためにコース設定組織の1元化を行う。本機関は、住民(たとえば、各地域の地区委員や町内会長など)、民間団体(たとえばきらめきプラザの方々、農園の方々や道の駅の方々)、行政(産業観光課を中心に)、高校生で構成をする。(高校生は高校との関係

- もあるため、最初の段階では毎回出席は難しい。)
- ②月1回以上定例会議を行い、コース作りを行う。
- ③住民の選抜は公募で集う。実際は月ごとに募集する形が良い。
- ④機関の総人数は30名ほどで行う。その中で、6つくらいの班に分ける。
- ⑤会議では大きな八頭町のマップを用意し、カラーペンで 書き込める形を取り、ワークショップ形式とする。
- ⑥先ずは全体で様々な意見を出し合い、コース作りは班別 で行いそれを発表する。
- ⑦ワークショップで書き込まれた中から、今の八頭の魅力 を伝えることができるコースを2本以上考え、まとめる。
- ⑧完成したコースは各駅のブースやきらめきプラザ、役場だけでなく、昼食処や夕食処、旅館やレジャー施設にも置く。また、コースが完成する度に八頭高校にも八頭の広報誌として送り、生徒に見てもらう。
- ⑨各コースは月ごとに更新するので、その月の情報も併せて載せることができる。(たとえば、マルシェの情報など) ⑩「食」の半券や「購買」の券も各コースで付けることで特典を付ける。各コースによって特典の形式を変える。(たとえば、スタンプラリー形式のコースならば、全て押された場合に特典プレゼントなど)

【関わり方とそれぞれの効果】

(1) 高校生の関わり方と効果

初期段階は、高校の「総合」の時間、写真部など文化系の部活動や有志を集うことによって行うことができると考える。高校生にはプレゼン能力も身につけることができ、今後のPR活動など外への発信力を高校生が行うこともできる。報告されたことは、その場で八頭町のマップを広げながらワークショップ形式で写真を張ったりメモを取ったりしながら、そのマップに書き込んでいく。

- EX) 郡家駅の近くの田んぼには夜の9時にホタルがいる。
- EX) 八頭高校の近くに春になると桜の花が咲いている。
- EX) 高校生が寄り道をするのは近所のお菓子屋だ。
- EX)夏場の竹林公園では17時になるとヒグラシが鳴く。 八頭町内の地図が高校生の調査によって埋まっていき、 様々なコース作成のキーポイントとなる。

	現地調査をしながら各ポイントを押さえ、それを八頭町
	のマップに書き込んでいく。その中から、建物を巡るとい
	ったコースではなく、歩く人の立場になった観点からコー
	スを作成する。
	 軌道にのった場合、高校生は、本機関における定例会で、
	例えば八頭町民ならば自分の家の周りの風景や状態を写
	真に収めたり、メモを取ったりし、町民外でも家までの道
	のりで同様のことを行い、ちょっとしたまちの変化を適宜
	報告する。
(2) 来訪者の関わり方と効果	来訪者は、実際に高校生が関わったコースを巡る。月約
(4) 米初年の関わり万と別木	
	2本のコースができ、×12カ月の24本のコースガイドがで
	きることになり、来訪者には好きなコースを巡ってもら
	う。コースガイドを設置する場所には併せて、投票箱も設
	置するので、どのコースが良かったのか、コースガイド内
	に切り取り線を設け、そこに該当番号を記入し、切って投
	票する。 また、投票をしてもらった場所によって特典を
	付ける。(たとえば、昼食処で投票をした場合、出し巻き
	卵を無料で1皿提供する、ペンションの場合、宿泊料の割
	り引など)
(3)住民、民間団体の関わり	日々のまちの変化を純粋に良いこと、悪いことを報告す
方	る。(たとえば、今はこの道を通るとタンポポという花が
	咲いていて綺麗で散歩コースとなっている。ここの道を通
	ると毎回、ゴミがあり人が寄り付かないなど。)併せて、
	悪かったことに対しては対策を行政と共に考える。
	※高校生も軌道にのれば参加可能である。
(4) 行政の関わり方	行政は住民協議会と連携して、そのコースに危険はない
	 のか(例えば、雪が降れば県道の道を通ると路面が凍結し
	 おり危険であるなど)といった、コースの安全性の確保を
	一行う。安全でない場合は、コースとして認めない。まちの
	悪いところを住民や民間団体と対策を一緒に考え、行政は
	考え出された対策を実行する。
	JACH CAUTCAJA CALI A VO
	TACH CAUTCAJA CONTINUEDO
	TACH CAUTEATA EXTITATION
	THE WOLLD'S AND THE SELECTION OF THE SEL
	THE WOLLD'S AND THE SELECTION OF THE SEL

【全体の効果】

【コース10選の選択】

来訪者などが投票をして下さった方々の票数を基に年間コースのコース10選を行う。その10選に選ばれたコースの作成に携わった人に特典を送る。(来訪者が投票をした場合の特典と同様なもの)そのコース10選は来年度に「八頭町魅力発見10選のロード」としてパンフレット化。(2012年度版として各コースのブースに置く。)来訪者にとっても毎年コースが変わり、またおススメコースが増え、特典もあり、何回も来ることが楽しみとなる。また、作成者側にも特典を付けることによって、作成の刺激にもなる。

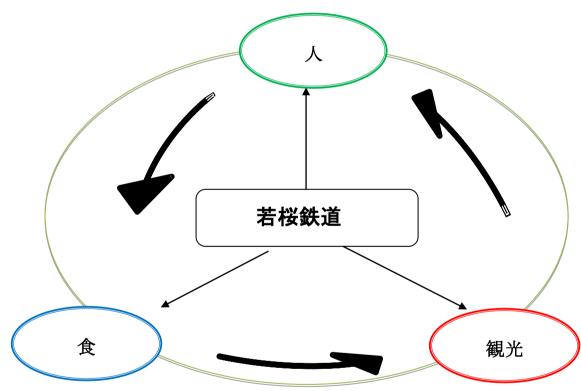
【注意点】		
(1) コースの重複問題	体験コースを作成するが、どのようなコースになるの	
	か、事前調査行わなければ、分からないこともある。また、	
	既にある様々な体験コースのマップと重なることもある。	
	(これは、観光地には多くのマップがあるため、結果とし	
	てそこを周ってしまう恐れがあり、行き方が違うといった	
	変化しかみられない恐れがある。)	
(2) ワークショップの問題	コースの作成は 【八頭町地域魅力発見プロジェクトの発	
	足】 が運営の主体となる。管理分野は行政となるが、実	
	際に管理しきれないこともあるため、その部分の管理を誰	
	が行うのか。また、管理が仮に不十分であっても、実際の	
	コース作成者は自分がこのコースを作成したという責任	
	も発生することがある。	
(3)会議の日数問題	1日中行う可能性もあり、コース作りは直ぐにできない	
	場合もある。定例会の日と時間を固定する必要もあり、高	
	校生が実際に定例会に参加する形になった場合は、会議時	
	間が少なくなる可能性がある。(平日の日中は授業、放課	
	後は部活、土日も部活や塾も考えられる。)	
(4) 高校生の関わり方 (将来	どのような視点からでも構わないが、写真やメモなど高	
的な関わり方の問題)	校生の事前の準備がカギとなる。また将来的には高校生も	
	定例会に参加するため、八頭町の魅力を若者から伝えてい	
	く環境作りをするまでの基盤をきちんと固めなければな	
	らない。高校生が関わることがなくなることも考えられ	
	る。	

第三章 「人」と「食」と「観光」をつなぐ

I. 沿線を活用した空間づくりの可能性

これまで沿線景観を基軸として、人、食、観光といった視点からのプランを述べてきた。これらのプランを個別に点で行うだけでなく、プランをつなぐ総合的な企画を考えることで、プランを同時に行いながら、かつ沿線を通して地域の人と観光客が一堂に集まれるような空間づくりができるのではないかと考え、とりわけ、これら3つのプランを「若桜鉄道」というキーワードでつないでみた。





たとえば、すでに郡家駅においておこなわれている軽トラ朝市といった駅前空間を利用した市場を活かして、プラス α としてマルシェ(市場)のような空間を作ることが考えられる。食などを媒介とした、地域住民と観光客をつなぐ新たな地域活性化の可能性を駅前が担うプランである。

地域の方々と観光客が一度に集まる空間づくりへ ~滞留拠点としての駅前空間の活用~

人々が集う必要性

地域のまちづくり、コミュニティづくりには、その地域に住む人々は もちろんのこと、地域外も含めた多様な人々が集う空間づくりが求めら れている。そして近年では、「食」の部分に着目した生活の集う場づく りが注目されている。こういった人の生活や活動の交流の場としては、 人々がそこに留まり楽しむことができる場所(マルシェ、滞留拠点など という)を創出することが効果的であり、とりわけまちの玄関口でもあ る「駅」前などにおいて行うことがより効果があると考えられる。それ は、まちの中の生活者だけでなく、外からも人が集まるまちづくりにつ ながると考えられる。

朝市も含め、駅前でマルシェを開催

(1) 概要

現在ある軽トラ朝市も含め、一定のイベントとして休日・祝日に多くの人々が交流できる場所として開催することが求められる。(たとえば、京都の旧府庁では、食材やお菓子、ジャムなどの加工品やお酒等の物品とコンサートなどを合わせたマルシェが定期的に行われている。)



(2) 効果

マルシェの最大の売りである点のひとつとして、そこに行けば地域の方々や地域外の方々などの実に幅広い人たちとの交流が生まれることが挙げられる。商品を買うだけではなく、買った物を食べる空間も確保することで、人々が「滞留する」という効果が生まれる。



多様な視点との連動をはかるまちづくり

~ワークショップを中心とした空間活用~

地域の人々や外からの観光客らが一堂に集まる空間を利用して、まちづくりに関するワークショップを行うなどして、まちの魅力や地域の宝を考えるなどの機会づくりをはかる。

地域により関心を持つことで、まちの魅力を 向上また、学習機能を兼ねた空間づくりを行う ことで子どもから大人まで多くの方々がまち への関心を拡げる場となる(環境学習やまちの



歴史文化学習、写真展など。書道や絵画教室などの連動も考えられる。)

各視点との連動をいかにはかるか

①外からの視点 との連動

駅前からまちへ繰り出す流れづくり・まち歩き

駅はそのまちの顔とも言われる 場所である。マルシェを開くとき に、その空間内に留まるだけでな く、そこを出発点としてまちに繰 り出すことができる機会を作るこ とも可能である。



八頭の魅力は何であるか、また今ある地域資源は何が挙げられるかといったワークショップを行う→ワークショップの内容をもとに実際にまちに繰り出してみる→そこで見聞きし、気付いたことなどを話し合うワークショップを行い、情報を共有してマップにまとめる。

こうした動きを繰り返しながら、まちの魅力案内をできる人的資源やマップ等の活用により、まちへ繰り出す流れを作り、まち歩きを楽しむ機会を作り出す(まちへのリンク機能)。また、駅前がインフォメーションセンターとして機能し、まち歩きを行う際にはマルシェの機能を活かして、各拠点との連動を図り、食べ歩きなども行えるような活用方法が考えられる。ダイエットのための徒歩コースや、サイクリングのためのコースを設定して、駅前から人々が活動の幅を広げる機会をつくる。

②活動機関

まちづくりについて、日々考える機会との連動

との連動

マルシェが開かれていない期間においても、行政とともにまちづくりを考えたり活動したりする主体を設定し、まちやまちづくりについて考える機会や機関を設ける。マルシェが開催されるときはマルシェの中で活動するが、それ以外のときでも人々がまちについて語り合い、意見を出し合う空間が必要である。

NPO 団体やまちづくり団体との連携をはかり、八頭町民で構成される町民協議会との連動をはかる。



③若者との連動

高校生や若者との連動

上記で挙げたことは、世代間交流ができるものであり、コンサート、 学習を含めすべて若者の活力、また他の地域から来た観光客などとの 交流、協働による空間づくりが考えられる。まちについて議論し合う ワークショップにおいても、行政や大人たちだけでなく、高校生の意 見も取り入れることで、視点の幅が広がると考える。

環境学習との連動など、八頭のような自然豊かで里山も残る地域ではこのようなイベントを連動させることで有意義なせることで有意義な人的・物的交流が可能となる。



八頭高校生と大学生による まちに関するワークショップ

④景観まちづくり との連動

景観的な観点からの連動

八頭町には景観計画がないため、五感を含む八頭の生活空間としての景観を将来的に保全・形成していくため、景観計画策定や景観マップなどの作成にむけて、沿線景観を中心とした景観まちづくり活動との連動も考えられる。



八頭町の景観について、何が地域の良い景観で、何が景観を阻害しているかを考えるワークショップを開催する。そうすることで、景観計画策定時に、良い景観については保全する指針となり得るし、景観を阻害しているものについては規制の指針を考える上で活用できる。

行政はこうした町民のまちづくり活動を支えるため、制度面を整える。そうすることで、沿線の景観規制をしたり、よいものは保全・創造したりする制度を定め、景観資源の活用を制度面からも応援する。

景観まちづくりに共通していることは、その「主体は地域住民であり、対象は地域であり、目的は地域課題を解決し、より良い生活を目指すということ」であるということを考えると、交流拠点がこれらを議論し合い、活動し合う場所となる。

総合プランの位置づけのために ~制度化による、まちづくりを応援!~



こうした、若桜鉄道の沿線を中心としたプランの対象となる地域や主体については、沿線付近や沿線に住む人々だけではない。沿線を中心として、まちに住む人々、行政、観光客、鉄道等、全体が楽しくなれるまちづくりをするとよりよいと考える。

この点、若桜鉄道を中心として、町内の他の地域との連携もはかれたり、沿線景観という視

点でこれらを包括したりすることで、まちの活性化をはかることを考えた。

楽しみながらする地域の活性化を「条例」でまとめ上げることで、制度面でまちづくり を応援し、支える。

第四章 若桜鉄道の景観保全条例の提案

「若桜鉄道を中心とした八頭町の地域活性化にむけた条例」(素案)

前文

鳥取県八頭町は、豊かな自然と四季折々のフルーツの栽培が盛んであり、また歴史の古い若桜鉄道や白兎伝説など、まち全体が自然と農業、歴史に支えられた美しい景観を有している。これらの景観は単に美しい自然だけではなく、人々の営みと、若桜鉄道の歴史に裏打ちされた、八頭町民共有の財産である。

しかしながら、近時、人口減少や若者の流出、高速道路建設に伴う滞留人口の減少に伴い、休耕田の増加、担い手不足などの事態が生じており、これからは、八頭の美しい景観を積極的に保全するとともに、八頭の地域活性化に対する取り組みを行い、もって自然、農業、歴史を継承していく必要がある。

特に八頭町とともに歴史を刻んできた若桜鉄道の沿線の景観保全は積極的に取り組む必要があり、若桜鉄道沿線を中心としたまちづくりを行うことによって、地域経済および地域社会の発展に寄与する。

第1条(目的)

この条例は、八頭町の若桜鉄道を中心とした八頭町の地域活性化のための基本理念を定め、八頭町、土地所有者など、町民及び事業者(八頭町外を含む)の責務を明らかにするとともに、八頭町の景観保全を効果的に推進するために基本方針を定めることにより、自然と歴史、文化が調和した魅力ある八頭町の形成に寄与する。

第2条(定義)

(1)沿線景観

若桜鉄道の沿線における景観であり、移動する電車及び電車を眺望する場所を視点場として考える。その際、目の前に見える近景のみではなく遠くの山々などの遠景も含むこととする。

(2)土地所有者など

沿線から見える土地を所有し、管理し、又は占有している者をいう。

第3条(基本理念)

景観の保全は、景観が現在及び将来にわたり町民が心豊かな生活を維持するための重要な 資源であることを認識し、八頭町に誇りを持つことができるとともに、資源を将来の世代 に引き継ぎ、さらには八頭町の魅力を積極的に発信していくことで地域活性化することを 目的とする。

第4条(責務)

(1)町の責務

町は、前条に定める基本理念にのっとり、沿線景観の保全についての施策を策定し、及び実施する責務を有する。また、町は、前項の施策の策定及び実施に当たっては、若桜鉄道沿線の状態、土地の所有及び利用の状況についての調査その他必要な措置を講ずるものとする。

(2)町民の青務

町民、事業者及び土地所有者などは、基本理念にのっとり沿線景観の保全に自ら努める とともに、町の施策にそった土地の利用につき事前協議を行う責務を有する。

第5条(基本方針)

八頭町は沿線景観を保全し、八頭の魅力を増進させ、もって八頭町の地域活性化をするために以下のような基本方針を定める。※詳細については「若桜鉄道を中心とした八頭町の地域活性化に向けた基本計画」で定める。

(1)駅舎

若桜鉄道の駅舎は木造を基本として、趣があり各地域の特徴として機能するような空間の創設に努める。

(2)沿線

- ①建物及び広告物の色彩は歴史と自然豊かな八頭の魅力に合致し、将来の八頭の魅力増進 のために資するスケール、色彩、形態、意匠とする。
- ②看板は八頭らしさを損なわないよう、色彩、形態、意匠に配慮する。
- ③若桜鉄道沿線の土地は雑草林や耕作放棄地、荒地等、八頭らしさを損なわないように花 を植えるなど、適切な措置を図る。
- ④その他若桜鉄道沿線の土地は、沿線の景観を損なわないように配慮した土地利用を行う ものとする。
- ⑤鉄道の車窓から遠景の山々の景色を阻害しないように、建物、広告物配置の場所や、色 彩、スケールに十分配慮する。
- ⑥八頭町から若桜鉄道と遠景の山脈を借景として眺める視点場を設定し、そこからの眺め を阻害しないように建物、広告物配置の場所や、色彩、スケールに十分配慮する。

(3)鉄道の内装・外装

若桜鉄道の外装及び内装は八頭町の自然、歴史、景観に配慮した形態、意匠とする。

(4)援助

八頭町は若桜鉄道沿線景観の保全のための様々な個人、団体(NPO 含む)に対し必要な援助を行うものとする。

(5)その他

沿線の景観だけでなく、八頭町の魅力を行政、町民が理解し、観光客にも積極的に発信するとともに、行政、町民、観光客が一体となってマルシェやワークショップ、若桜鉄道車窓からの景観写真コンテスト、農村民泊などによって、町民が八頭町への誇りを持ち、観光客がもう一度訪れたいと思うまちづくりを目指す。

第6条(沿線景観サポーター制度)

- (1)八頭町長は、沿線景観の形成に積極的に取り組む個人、団体 (NPO 含む)を沿線景観サポーターとして登録できる。
- (2)沿線景観サポーターは、町長より駅舎ごとの情報提供を受け、保全活動及び、保全に必要な提案を町長に行い、さらに次世代のサポーターを育成する。

第7条(協議会)

町民は八頭の沿線景観保全や、魅力あるまちづくりのために、町民同士の協力連絡機関である町民協議会を組織し、以下の行為を行う。

- (1)沿線景観形成のための提案
- (2)事前協議への参加
- (3)一定の町民の同意により、沿線景観を損なうものの変更要及び撤去要求を町長または所有者など、事業者に対して請求することができる。

第8条(行政と住民の努力規定)

八頭町と町民は、本条例の目的の実現のために、相互に協力し、八頭町の地域活性化の ために対等な立場で活動するように努めなければならない。また、八頭町は本条例の目的 達成のために、必要に応じて他の自治体や関係機関と協力するものとする。

まちづくりと地域の宝

若桜鉄道

人とまちづくり

・町民協議会の創設

情報共有

沿線の管理監督 まちづくりイベントの企画 運営

•ワークショップ

朝市との連動

マップ作り

世代間交流

•制度化

地域指定

規制、助成

市民や行政等との連動

食とまちづくり

・「地元の食材で振る舞う食マップ」〜星を頂いて自分の店を宣伝しよう大作戦〜

八頭のブランドマップ

三ツ星制度

・つくれる

作物

八頭ブランド

流通経路

・まもれる

後継者・担い手

第1次産業

・そだつ

将来のまち、まち全体

観光とまちづくり

・観光マンホール

観光コース上に地域の特色と 矢印を導入

•観光計画書

住民と観光客の考える「まちの将来像」

•地元にも魅力的な観光を作る

観光についての住民の意見

・既存の観光を守る

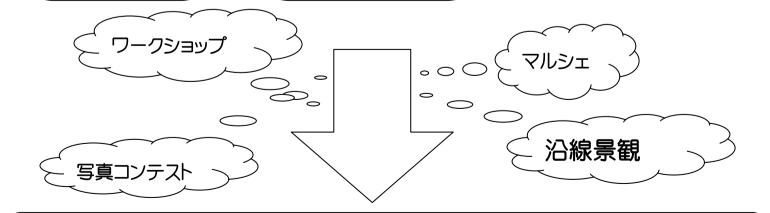
自然、環境、景観の保護

・新たな観光、人を育てる

八頭における観光を日本中に広 報する!

•広報

ブログ、Twitter、クーポン券



若桜鉄道を中心とした八頭町の地域活性化に向けた包括条例

おわりに

2011 年 7 月に初めて八頭町を訪れて以来、約 4 ヵ月間、様々な調査を行ってきました。その中で、八頭町には様々な地域資源があることと同時に地元住民の方々の温かさを感じました。また、地元住民の方々、行政の方々や商工会の方々、それぞれの視点からすでにまちづくりを行っておられ、そしてそこに共通することは、八頭の魅力をもっと外へ発信していこうという熱い想いや気持ちでした。今あるものを活かしながら、それぞれの活動をつなげ、そしてさらにより良いものにしていくのかがカギとなると思います。若桜鉄道を中心とした本企画案が、八頭町におけるまちづくりのさらなる飛躍の一助になれば幸いです。

最後になりますが、調査活動や企画案作成を行うにあたりまして、鳥取県や八頭町の行政の方々、商工会の方々、農園や宿泊などの生業を営んでいる方々、若桜鉄道を守る会などの民間団体の方々、八頭高校の方々、そして突然のインタビューにも関わらずご対応して下さった地元住民の方々には、ご理解とご協力をいただきましたこと、誠にありがとうございました。ここに、厚く御礼申し上げます。



2011 年 11 月 12 日龍谷大学 牛尾洋也みらいの環境を支える龍谷プロジェクト